

# 中国横断自動車道尾道松江線建設等 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(44)

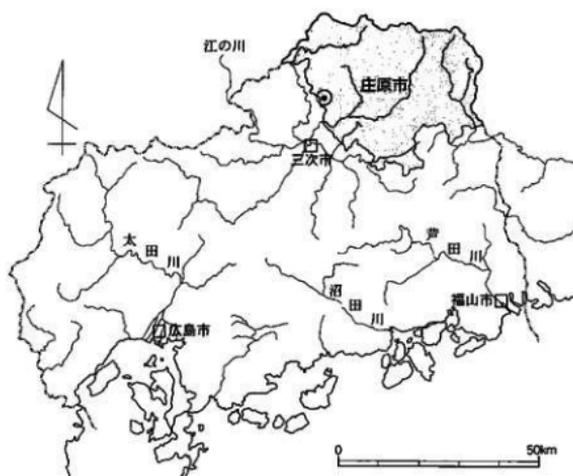
原畑遺跡 (第2次調査)

2015

公益財団法人 広島県教育事業団

# 中国横断自動車道尾道松江線建設等に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（44）

## 原畑遺跡（第2次調査）



庄原市位置図（◎は遺跡を示す。）

2015

公益財団法人 広島県教育事業団

## 例 言

- 1 本書は、平成 26 (2014) 年度に実施した尾道松江線口和 I C 災害復旧 (その 1) 工事に係る原畑遺跡 (第 2 次調査) (庄原市口和町大月字原畑 607, 612-1 所在) の発掘調査報告である。
- 2 発掘調査及び整理作業・報告書作成は、国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所との委託契約により公益財団法人広島県教育事業団が実施した。
- 3 発掘調査は、梅本健治・辻満久が担当した。
- 4 出土遺物の整理・復元は梅本・辻と賃金職員の有原ひろみが、実測・図面の整理・写真撮影は梅本が中心となって行った。
- 5 本書は、梅本が執筆・編集した。
- 6 図版の遺物番号と挿図の遺物番号は同一である。
- 7 本書に使用した北方位はすべて旧日本測地系平面直角座標第Ⅲ座標系北である。
- 8 第 2 図は国土交通省国土地理院発行の 1:25,000 の地形図 (永田) を使用した。
- 9 遺構の略号は SB; 掘立柱建物跡, SK, 土坑, SX; 性格不明の遺構, SP・P; 柱穴を示す。
- 10 記録類及び出土品は、すべて広島県立埋蔵文化財センター (広島市西区観音新町四丁目 8 番 49 号) において保管している。

# 目 次

I はじめに	(1)
II 位置と環境	(8)
III 調査の概要	(14)
IV 遺構と遺物	(17)
V ま と め	(24)

## 挿図目次

第1図 中国横断自動車道尾道松江線路線と調査した遺跡の位置図	(2)
第2図 原畑遺跡周辺遺跡分布図 (1:25,000)	(9)
第3図 周辺地形図 (1:2,000)	(15)
第4図 遺構配置図 (1:200)	(16)
第5図 SB1・2実測図 (1:60)	(折込み)
第6図 SK1~3・SP1実測図 (1:10, 1:20)	(19)
第7図 SX1実測図 (1:60)	(20)
第8図 SX2実測図 (1:60)	(折込み)
第9図 出土遺物実測図 (1:3, 1:4)	(22)

## 表目次

第1表 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧	(3)
-------------------------------	-----

## 図版目次

図版1 a 原畑遺跡遠景 (南から)	
b 調査前全景 (南から)	
c 調査後全景 (北西から)	

- 図版2 a SB1・2 (北から)  
b SB1・P1 石臼出土状況 (北から)  
c SK1 (南から)
- 図版3 a SK3 (東から)  
b SX1 (北西から)  
c 同上 (南東から)
- 図版4 a SX1土層 (南から)  
b SX2 (北西から)  
c 同上 (南から)
- 図版5 a SX2土層 (西から)  
b SP1高杯出土状況 (南から)  
c 作業風景 (SX2, 北東から)
- 図版6 a 作業風景 (SK1, 北から)  
b 作業風景 (SB1・2, 東から)  
c 出土遺物

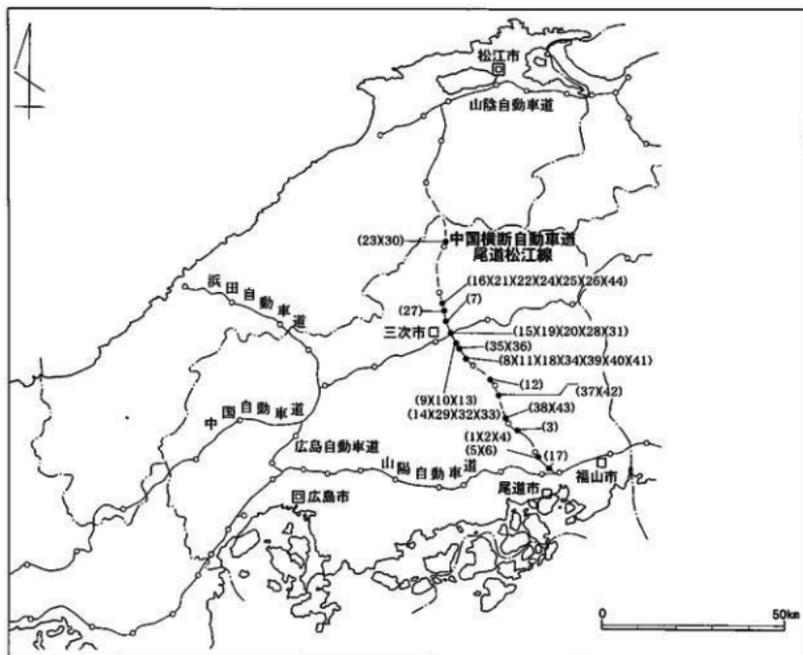
# 1 はじめに

原畑遺跡（第2次調査）の発掘調査は尾道松江線口和IC災害復旧（その1）工事に係るものである。本事業は、大規模な土砂崩れをおこした口和IC西側一帯の集水・排水設備の健全化を通して地盤の復旧を行い、このような災害の再発を防止しようとするものである。

平成25（2013）年9月5日未明に台風17号の影響により口和IC西側一帯で大規模な土砂崩れが発生した。付近には中国横断自動車道建設に伴って発掘調査を行った原畑遺跡や番久遺跡、稲干場古墳群などの遺跡が存在したため、遺跡の損壊が懸念された。そのため、災害発生直後の同年9月6日、国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所（以下、「国交省」という。）・庄原市教育委員会（以下、「市教委」という。）・広島県教育委員会（以下、「県教委」という。）は、現地で被災状況を確認後、現地踏査を行い、原畑遺跡の一部が損壊を受けていることを確認した。同年9月26日、その旨を県教委は国交省に通知した。これを受けて、平成26（2014）年1月28日、国交省は当該事業地内の文化財等の有無及び取扱いについて、県教委に協議した。県教委は原畑遺跡（第2次調査）の調査区が平成20年度に発掘調査を実施した第1次調査区の西側に隣接しており、弥生～古墳時代の集落跡が存在する旨を通知した。国交省は同年2月10日付けで市教委あてに文化財保護法第94条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘の通知（土木工事の通知）」を提出し、市教委は同年2月14日付けで国交省宛て工事に先立って発掘調査が必要である旨を通知した。国交省はこれを受けて、同年2月18日付けで公益財団法人広島県教育事業団（以下、「教育事業団」という。）に原畑遺跡（第2次調査）の調査依頼を行なった。教育事業団は平成26年2月20日付けで文化財保護法第92条第1項に基づく発掘調査届を市教委宛て提出し、同年2月24日付けで法の趣旨を尊重し、慎重に発掘調査を実施するよう指示を受けた。国交省と教育事業団は同年4月1日付けで委託契約を結び、教育事業団は同年4月7日から5月23日までの1か月半発掘調査を行った。調査面積は330㎡である。

本報告書は、以上のような経緯のもとに行なった発掘調査の成果をまとめたものであり、今後の埋蔵文化財の資料として、またこの地域の歴史の一端を知る手がかりとして、少しでも寄与できれば幸いである。

発掘調査にあたっては、国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所、庄原市教育委員会及び地元の方々に多大な御協力をいただきました。記して感謝の意を表します。



第1図 中国横断自動車道尾道松江線路線と調査した遺跡の位置図

- |   |                           |                               |                               |
|---|---------------------------|-------------------------------|-------------------------------|
| (1) 牛の皮城跡 (第1～3次)<br>曾川2号遺跡             | (14) 上陣遺跡                 | (25) 向泉川平1号遺跡<br>向泉川平2号遺跡     | (32) 宮の本遺跡<br>宮の本第11・33～35号古墳 |
| (2) 曾川1号遺跡 (A～D地区)                      | (15) 和知白鳥遺跡 (第2次)         | (26) 石谷2号遺跡 (第1・2次)<br>石谷3号遺跡 | (33) 福山第3～6号古墳                |
| (3) 池ノ奥古墳                               | (16) 曲第2～5号古墳             | (27) 馬ノ段遺跡<br>馬ノ段第1・2号横穴墓     | (34) 下矢井南第3～5号古墳              |
| (4) 城郷遺跡<br>牛の皮城跡 (第4次)<br>曾川1号遺跡 (E地区) | (17) 家ノ城跡 (第1～5次)         | (28) 三重1号遺跡 (第1・2次)           | (35) 若見遺跡<br>柴刈遺跡             |
| (5) 曾川1号遺跡 (G～J地区)                      | (18) 片野中山第9～12号古墳<br>古谷遺跡 | (29) 宮の本第20～26・31・32号<br>古墳   | (36) 三隅山遺跡                    |
| (6) 曾川1号遺跡 (K地区)                        | (19) 和知白鳥遺跡 (第1次)         | (30) 岡家第1～7号古墳<br>岡1号遺跡       | (37) 頼藤城跡                     |
| (7) 礼島古墳<br>大平遺跡<br>狭山大平古墳              | (20) 段遺跡 (第1・2次)          | (31) 風呂谷遺跡<br>風呂谷古墳           | (38) 杉谷遺跡                     |
| (8) 北野山遺跡                               | (21) 川平第1号古墳<br>常定川平1号遺跡  |                               | (39) 海田原第24～27号古墳             |
| (9) 向江田中山遺跡                             | (22) 船千堀第2～4・9号古墳         |                               | (40) 殿平古墳                     |
| (10) 櫻尾第1～3号古墳                          | (23) 只野原1号遺跡<br>只野原2号遺跡   |                               | (41) 長瀬山北第1～6号古墳              |
| (11) 大寺奥池第1～3・7号古墳                      | (24) 番久遺跡<br>原畑遺跡 (第1次調査) |                               | (42) 善正平1号遺跡<br>善正平2号遺跡       |
| (12) 茶臼古墳                               |                           |                               | (43) 大柳遺跡                     |
| (13) 瀬戸越南古墳                             |                           |                               | (44) 尾道遺跡 (第2次調査)             |

第1表 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧

報告書	遺跡名	地区名	調査期間	所在地	時期	内容
(1)	牛の皮城跡 (北郡群)	第1次	畝状整地群 平成15年1月20日 ～3月14日	尾道市御調町大町 字二の丸	中世	城跡
		第2次	1～4郭 平成15年7月7日 ～10月31日			
		第3次	西壁場 平成15年11月1日 ～11月28日			
	曾川2号遺跡		平成15年1月20日 ～3月7日	尾道市御調町大町 字西川	古代末～中世	集落跡
(2)	曾川1号遺跡	A地区	旧・平成14年 年度調査区 平成14年10月21日 ～平成15年1月17日	尾道市御調町大町 字曾川	弥生時代～中世	集落跡
		B地区	旧・P2第一調 査区 平成15年4月7日 ～5月23日			
		C地区	旧・P2第二調 査区			
		D地区	旧・P1 平成16年1月6日 ～2月5日			
(3)	池ノ奥古墳		平成16年8月23日 ～10月28日	世羅郡世羅町宇津戸 字天神	古墳時代後期	古墳
(4)	城根遺跡		平成15年1月27日 ～3月7日	尾道市御調町大町 字城根	古墳時代か	箱式石棺
	牛の皮城跡 (北郡群)	第4次	5郭 平成18年1月30日 ～2月24日	尾道市御調町大町 字二の丸	中世	城跡
	曾川1号遺跡	E地区	旧・P4 平成15年12月1日 ～12月19日	尾道市御調町大町 字米田	縄文時代後期 ～中世	遺物包含 層
(5)	曾川1号遺跡	G地区	旧・P3 平成16年6月7日 ～8月6日	尾道市御調町大町 字曾川・米田	弥生時代～中世	集落跡
		H地区	旧・P3側道			
		I地区	旧・P4側道			
		J地区	旧・P2 平成17年1月11日 ～3月4日			
(6)	曾川1号遺跡	K地区	平成17年4月11日 ～7月1日	尾道市御調町大町 字曾川・米田	弥生時代～中世	集落跡
(7)	札幌古墳		平成17年11月21日 ～平成18年1月27日	三次市後山町字札幌	古墳時代後期	古墳
	大平遺跡		平成19年6月25日 ～10月5日	三次市後山町字大平	弥生時代後期 ～古代	集落跡
	後山大平古墳		平成19年6月25日 ～10月5日	三次市後山町字大平	古墳時代後期	古墳
(8)	北野山遺跡		平成18年7月3日 ～8月4日	三次市吉舎町敷地	平安時代	仏教関連 の施設跡
(9)	向江田中山遺跡		平成18年4月17日 ～6月23日	三次市向江田町 字中山	古墳時代末 ～古代	集落跡
(10)	権現第1～3号古墳		平成17年7月11日 ～11月11日	三次市向江田町権現	古墳時代中期	古墳
(11)	大善興池第1～3・7号古墳		平成18年4月17日 ～8月4日	三次市吉舎町敷地 字中山	古墳時代後期	古墳
(12)	茶臼古墳		平成20年7月7日 ～9月5日	三次市甲奴町大字宇賀	古墳時代中期	古墳
(13)	瀬戸越南古墳		平成19年6月25日 ～8月10日	三次市向江田町 字瀬戸越	古墳時代中期	古墳
(14)	上陣遺跡		平成19年7月9日 ～8月31日	三次市向江田町字上陣	古墳時代中期	集落跡
(15)	和知白鳥遺跡(第2次)		平成19年9月25日 ～12月21日	三次市和知町字白鳥	後周石室時代	集落跡
(16)	曲第2～5号古墳		平成19年7月2日 ～9月21日	庄原市口和町金田 字本谷	古墳時代中期	古墳
			平成19年12月3日 ～12月7日			

報告書	遺跡名	地区名	調査期間	所在地	時期	内容
(17)	家ノ城跡	第1次	南東郭群 平成15年9月16日 ～10月31日	尾原市木之庄町本梨 字家城東平	中世	城跡
		第2次	南東郭群 平成16年5月17日 ～6月11日			
		第3次	1郭周辺 平成17年10月17日 ～11月11日			
		第4次	1郭・北尾根 平成18年4月17日 ～7月21日			
		第5次	1郭・北西尾根 平成19年4月16日 ～6月15日			
(18)	片野中山第9～12号古墳		平成19年4月16日 ～8月8日	三次市吉舎町敷地 字中山	古墳時代中期	古墳
	右谷遺跡		平成19年4月16日 ～8月8日	三次市吉舎町敷地 字中山	古墳時代後期 ～古代	集落跡
(19)	和知白鳥遺跡(第1次)		平成18年4月17日 ～12月22日	三次市和知町 字白鳥・四拾貫町字三重	古墳時代中期 ～古代	集落跡・古墳
(20)	段遺跡	第1次	平成18年9月19日 ～12月15日	三次市四拾貫町字段	古墳時代中期 ～後期	集落跡
		第2次	平成19年9月25日 ～12月21日			
(21)	川平第1号古墳		平成20年4月21日 ～6月20日	庄原市口和町常定 字川平	古墳時代後期	古墳
	常定川平1号遺跡				古墳時代中期	集落跡
	常定川平2号遺跡				縄文時代	陥し穴
(22)	福干場第2～4・9号古墳		平成19年10月9日 ～12月21日	庄原市口和町大月 字福干場	古墳時代後期	古墳
(23)	只野原1号遺跡		平成20年9月8日 ～9月26日	庄原市高野町下門田 字只野原	古墳時代	韓式石棺
	只野原2号遺跡		平成22年4月19日 ～11月19日	庄原市高野町下門田 字只野原	不明	自然流跡
	只野原3号遺跡	第1次	平成21年5月18日 ～8月28日	庄原市高野町下門田 字登立	旧石器時代 ～古墳時代	包含層 集落跡
		第2次	平成22年4月19日 ～11月19日			
(24)	番久遺跡		平成20年7月28日 ～12月25日	庄原市口和町大月 字番久	縄文時代～ 古墳時代	集落跡 陥し穴
	原畑遺跡(第1次調査)			庄原市口和町大月 字原畑	弥生時代～ 古墳時代	集落跡
(25)	向泉川平1号遺跡		平成20年4月21日 ～7月11日	庄原市口和町向泉 字川平	旧石器時代 ～縄文時代	包含層
	向泉川平2号遺跡				弥生時代～ 古墳時代	集落跡
(26)	石谷2号遺跡	第1次	平成21年4月13日 ～6月12日	庄原市口和町金田 字塩谷	縄文時代	陥し穴
		第2次	平成22年4月12日 ～6月23日			
	石谷3号遺跡		平成21年4月13日 ～6月12日	庄原市口和町金田 字塩谷	古墳時代後期	集落跡
(27)	馬ヶ段遺跡		平成20年4月14日 ～7月11日	庄原市水越町字馬ヶ段	古墳時代～ 平安時代	集落跡 横穴
	馬ヶ段第1号横穴墓 馬ヶ段第2号横穴墓			庄原市水越町字塩谷	平安時代	炭窯跡
(28)	三重1号遺跡	第1次	平成20年11月4日 ～12月26日	三次市四拾貫町字三重	古墳時代～古代	集落跡
		第2次	平成21年4月13日 ～9月18日			

報告書	遺跡名	地区名	調査期間	所在地	時期	内容	
(29)	宮の本第 20 ～ 26・31・32 号古墳		平成 19 年 4 月 16 日 ～ 12 月 21 日	三次市向江田町 字宮本・天神	古墳時代前期 ～ 後期	古墳	
(30)	岡東第 1 ～ 7 号古墳		平成 20 年 5 月 7 日 ～ 9 月 26 日	庄原市高野町岡大内 字岡	古墳時代中期	古墳	
	岡 1 号遺跡				縄文時代	陥し穴	
	岡 2 号遺跡		平成 21 年 4 月 13 日 ～ 5 月 15 日		古墳時代後期	集落跡	
	半戸 1 号遺跡		平成 22 年 4 月 12 日 ～ 5 月 14 日		庄原市高野町岡大内 字半戸	縄文時代	陥し穴
	岡東第 1 号横穴墓		平成 24 年 9 月 3 日 ～ 9 月 21 日		庄原市高野町岡大内 字岡	古墳時代後期	横穴
(31)	風呂谷遺跡		平成 21 年 5 月 18 日 ～ 8 月 28 日	三次市四給貴町	旧石器～縄文時代・ 古墳時代～古代	包含地 集落跡	
	風呂谷古墳				古墳時代後期	古墳	
(32)	宮の本遺跡		平成 20 年 4 月 21 日 ～ 10 月 31 日	三次市向江田町字宮本	古代	集落跡	
	宮の本第 11・33 ～ 35 号古墳				古墳時代後期 ～ 古代	古墳	
(33)	箱山第 3 ～ 6 号古墳		平成 18 年 8 月 21 日 ～ 12 月 8 日	三次市向江田町字箱山	古墳時代前～ 後期	古墳	
(34)	下矢井南第 3 ～ 5 号古墳		平成 19 年 10 月 9 日 ～ 12 月 21 日	三次市吉舎町矢井 字西見山、敷地字北野山	古墳時代前・ 中期	古墳	
(35)	若見追遺跡		平成 19 年 4 月 16 日 ～ 5 月 25 日	三次市三良坂町岡田 字若見追	古代	集落跡	
	畑尻遺跡		平成 21 年 4 月 13 日 ～ 6 月 5 日	三次市三良坂町岡田 字畑尻	旧石器～縄文時 代・近世	陥し穴・ 集落跡	
(36)	三隅山遺跡		平成 24 年 4 月 9 日 ～ 8 月 10 日	三次市三良坂町長田 字三隅山、字堂面	中世～近世	墓地	
(37)	頼藤城跡		平成 20 年 4 月 21 日 ～ 7 月 31 日	三次市甲奴町小童 字塚ヶ道、字小豆山	中世	城跡	
(38)	杉谷遺跡		平成 21 年 9 月 7 日 ～ 10 月 16 日	世羅郡世羅町東上原 字杉谷	古墳時代後期・ 中近世	墓・集落跡	
(39)	海田原第 24 ～ 27 号古墳		平成 22 年 9 月 27 日 ～ 12 月 17 日	三次市吉舎町海田原 字殿平	古墳時代中期 ～ 後期	古墳	
(40)	殿平古墳		平成 20 年 9 月 24 日 ～ 12 月 26 日	三次市吉舎町海田原 字殿平	古墳時代中期	古墳	
	長畑山古墳		平成 24 年 9 月 24 日 ～ 12 月 26 日	三次市吉舎町海田原 字長畑山	古墳時代後期	古墳	
(41)	長畑山北第 1 ～ 6 号古墳		平成 21 年 6 月 29 日 ～ 12 月 22 日	三次市吉舎町海田原 字長畑山	古墳時代後期	古墳	
(42)	善正平 1 号遺跡、善正平 2 号遺跡		平成 21 年 4 月 13 日 ～ 9 月 25 日	三次市甲奴町字賀 字善正平	古墳時代後期 ～ 古代	集落跡	
(43)	大柳遺跡		平成 23 年 5 月 9 日 ～ 8 月 26 日	世羅郡世羅町大字川尻 字大柳山	中世	寺院関連 遺構	
(44) 本書	原畑遺跡 (第 2 次調査)		平成 26 年 4 月 7 日 ～ 5 月 23 日	庄原市口和町大月 字原畑	古墳時代 ・ 中近世	集落跡	

(報告書)

- (1) 財団法人広島県教育事業団『牛の皮城跡・曾川2号遺跡 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』2005年
- (2) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2) 曾川1号遺跡(A~D地区)』2006年
- (3) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(3) 池ノ奥古墳』2007年
- (4) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(4) 城根遺跡 曾川1号遺跡(E地区) 牛の皮城跡(第4次)』2008年
- (5) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(5) 曾川1号遺跡(G~J地区)』2008年
- (6) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(6) 曾川1号遺跡(K地区)』2008年
- (7) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(7) 礼場古墳・大平遺跡・後山大平古墳』2009年
- (8) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(8) 北野山遺跡』2009年
- (9) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(9) 向江田中山遺跡』2010年
- (10) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(10) 権現第1~3号古墳』2010年
- (11) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(11) 大番奥池第1~3・7号古墳』2010年
- (12) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(12) 茶臼古墳』2011年
- (13) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(13) 瀬戸越南古墳』2011年
- (14) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(14) 上陣遺跡』2011年
- (15) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(15) 和知白鳥遺跡1(旧石器時代の調査)』2011年
- (16) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(16) 曲第2~5号古墳』2011年
- (17) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(17) 家ノ城跡(第1~5次)』2012年
- (18) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(18) 片野中山第9~12号古墳・右谷遺跡』2012年
- (19) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(19) 和知白鳥遺跡2(古墳時代の調査)』2012年
- (20) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(20) 段遺跡』2012年
- (21) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(21) 川平第1号古墳・常定川平1号遺跡・常定川平2号遺跡』2012年
- (22) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(22) 稲干場第2~4・9号古墳』2012年
- (23) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(23) 只野原1号遺跡・只野原2号遺跡・只野原3号遺跡』2013年

- (24) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(24)番久遺跡・原畑遺跡』2013年
- (25) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(25)向泉川平1号遺跡・向泉川平2号遺跡』2013年
- (26) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(26)石谷2号遺跡・石谷3号遺跡』2013年
- (27) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(27)馬ヶ段遺跡・皇塩遺跡』2013年
- (28) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(28)三重1号遺跡』2013年
- (29) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(29)宮の本第20～26・31・32号古墳』2013年
- (30) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(30)岡東第1～7号古墳・岡1号遺跡・岡2号遺跡・半戸1号遺跡・岡東第1号横穴』2014年
- (31) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(31)風呂谷遺跡・風呂谷古墳』2014年
- (32) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(32)宮の本遺跡、宮の本第11・33～35号古墳』2014年
- (33) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(33)箱山第3～6号古墳』2014年
- (34) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(34)下矢井南第3～5号古墳』2014年
- (35) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(35)若見迫遺跡・畑尻遺跡』2014年
- (36) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(36)三隅山遺跡』2014年
- (37) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(37)頼藤城跡』2014年
- (38) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(38)杉谷遺跡』2014年
- (39) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(39)海田原第24～27号古墳』2015年
- (40) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(40)殿平古墳・長畑山古墳』2015年
- (41) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(41)長畑山北第1～6号古墳』2015年
- (42) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(42)善正平1号遺跡・善正平2号遺跡』2015年
- (43) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(43)大柳遺跡』2015年
- (44) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設等に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(44)原畑遺跡(第2次調査)』2015年

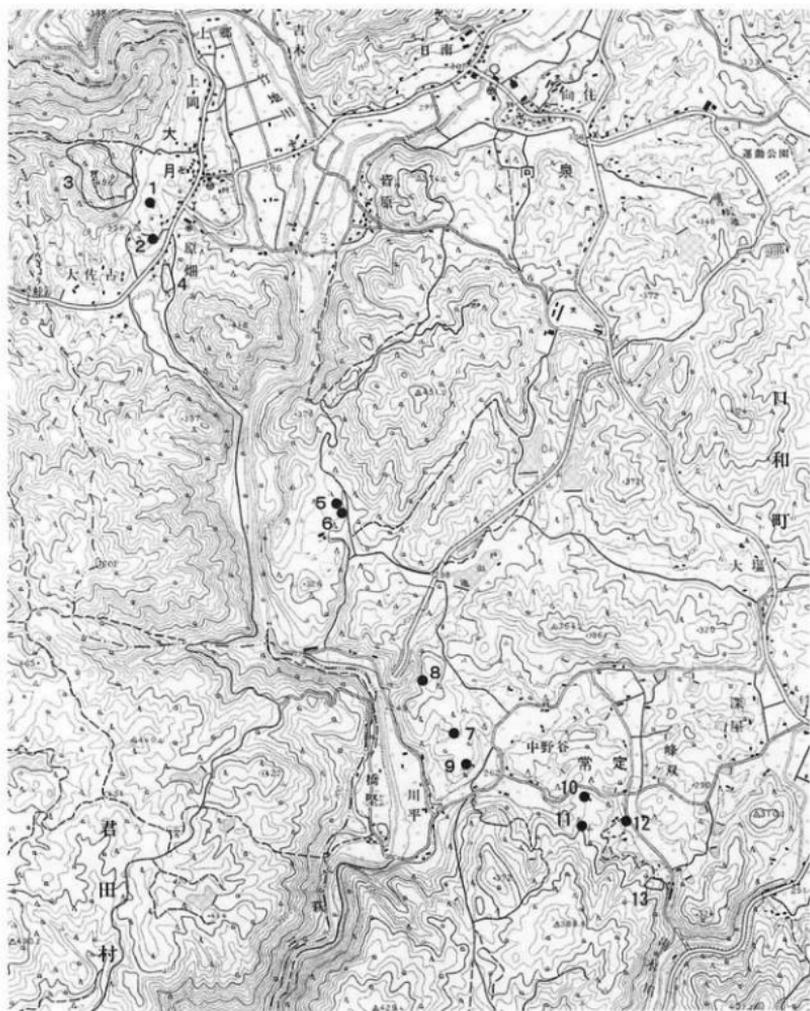
## II 位置と環境

原畑遺跡は広島県北部の庄原市口和町大月に所在する。庄原市域の西部中央に位置する口和町は旧比婆郡に属し、平成 17 (2005) 年に庄原市と合併した。南北 18.7km、東西 8.7km の南北に長い町域で、原畑遺跡は町域中央の西辺、三次市との市境近くにある。地形的には中国脊梁山地西端の備北山地を形成する大万木山山塊の東半にあたり、町域ほぼ中央に位置する西から大月・向泉・湯木の各集落を東西に結ぶあたりから以北は熊山 (標高 1018.9 m)、船山 (標高 939.7 m)、八国見山 (標高 844.7 m)、鳥袋山 (標高 770.5 m)、釜峰山 (標高 788.2 m) など標高 700 ~ 1,000 m 級の山塊が連なり、南半は南端の西城川沿いにかけて標高 200 ~ 400 m 台の低丘陵とそれらの間に盆地状の小規模な平野部が点在する。このような北から南に最大 800 m の高低差のある町域の北から南に西から萩川、湯木川、藤根川の 3 河川が流れ下り、東から西に流れる江の川支流西城川に合流する。萩川・竹地川沿いの大月・向泉、湯木川沿いの湯木・水田など河川沿いに集落が点在し、これらの集落周辺や常定・金田など主として町域南半の標高 200 ~ 300 m 程度の低丘陵地帯に古墳や集落跡、山城跡などの遺跡が残されている。ここでは、調査された遺跡を中心に、時代順に口和町の中世までの歴史的環境をみていくことにする。

口和町内の遺跡の発掘調査の多くは中国横断自動車道建設に伴って行われており、それ以前はパイロット開拓事業に伴う昭和 38 (1963) 年の横穴墓群を主体とする常定峯双遺跡群、昭和 53 (1978) 年の町道改良に伴う池津第 1 号古墳、そして平成 10 (1998) 年の農道整備事業に伴う金田第 2 号古墳の発掘調査が主要なものであった。

旧石器・縄文時代 三次市の和知白鳥遺跡<sup>(1)</sup>や段遺跡<sup>(2)</sup>、庄原市高野町の只野原 3 号遺跡<sup>(3)</sup>など、近年中国山地地域で注目すべき旧石器時代遺跡の調査が相次いだ<sup>(4)</sup>が、口和町内でも向泉川平 1 号遺跡の調査が行われた。北から南に流れる萩川東岸の丘陵南端に位置し、後期旧石器時代前半の第 3 文化層からは斧状石器・錐状石器・蔽石などが出土している。玉髓・凝灰岩・松脂岩が主要な石材である。また、第 1 文化層では縄文時代前期前半の羽島下層式に属する爪形文・刺突文や無文の縄文土器が、凝灰岩を主要な石材とする尖頭器・石匙・蔽石などと共に出土している。

縄文時代の遺構と考えられている落とし穴は、口和町内でも石谷 2 号遺跡<sup>(5)</sup> (42 基) をはじめ、番久遺跡<sup>(6)</sup> (5 基)・常定川平 2 号遺跡<sup>(7)</sup> (4 基) などで検出されている。平面形が円形・楕円形・長方形など、平面規模が 1 m、深さ 1 m 程度のもので、底面には小ピットがあることが多い。石谷 2 号遺跡・番久遺跡は丘陵頂部、常定川平 2 号遺跡は小谷に臨む丘陵斜面にいずれも列状に落とし穴が作られていた。特に、検出数の多い石谷 2 号遺跡では、平面形楕円形・隅丸長方形の落とし穴が 8 割を占めている。長軸 0.86 ~ 1.88 m × 短軸 0.45 ~ 1.58 m、深さ 0.7 ~ 2.62 m の規模で、36 基の底面では小ピットが検出されている。



第2図 原畑遺跡周辺遺跡分布図 (1:25,000)

- 1 原畑遺跡 2 番久遺跡 3 黒岩城跡 4 稲干場第2～4・9号古墳 5 向泉川平1号遺跡  
 6 向泉川平2号遺跡 7 常定川平1号遺跡 8 常定川平2号遺跡 9 常定川平第1号古墳  
 10 常定製鉄遺跡 11 常定窯跡 12 常定住居跡 13 常定峯双第1～6号横穴

弥生時代 この時期の遺構を検出した遺跡としては、稲干場第3号古墳<sup>(8)</sup>SB1・SK1、原畑遺跡<sup>(9)</sup>(第1次調査)、向泉川平2号遺跡がある。稲干場第3号古墳の南側丘陵端部で検出したSB1は弥生時代後期中葉の2本柱構造の堅穴住居跡で、平面形は一辺約4.5mの隅丸方形である。近接するSK1は長軸2.8mの平面形長楕円形の土坑で、覆土から弥生時代後期の甕や砥石が出土した。原畑遺跡では、弥生時代後期の堅穴住居跡3軒を検出した。いずれも平面形円形で、径5～6mほどの大きさである。柱構造はSB3は4本柱から6本柱に拡張しており、SB19は7～8本柱の多柱穴である。SB3・19では住居内から多量の炭化物を検出し、SB3では甕や砥石が出土した。また、遺構には伴わないが、弥生時代前期の土器がややまとまって出土している。古墳時代の小規模集落である向泉川平2号遺跡では少し離れて弥生時代終末頃の径3.6m、平面形円形で2本柱構造の焼失家屋を検出している。

古墳時代 古墳と集落跡がある。口和町内の古墳は約150基あるとされているが、発掘調査されたのは横穴墓を含め、20基程度である。木棺・箱式石棺・土坑など堅穴系埋葬施設をもつ古墳として、曲第2・3号古墳<sup>(11)</sup>、稲干場第2～4・9号古墳<sup>(12)</sup>がある。曲第2号古墳は湯木川下流西岸の丘陵上に立地する直径12×13.5mの円墳で、主体部の木棺墓から三角板横板併用鉄留短甲が出土した。5世紀後半に築造・使用されたと考えられ、周囲には近接して径数mの小規模な円墳(埋葬施設は箱式石棺)が3基築かれている。原畑遺跡南東500mの丘陵尾根上には6世紀前半に稲干場第3・4号古墳が築かれている。前者は木棺墓を埋葬施設とする直径10mの円墳、後者は直径13mの円墳で、土坑墓を埋葬施設とする。いずれも埋葬施設からの遺物の出土はなく、周溝内や周溝内の土坑から須恵器が出土している。丘陵端部の第9号古墳は直径10.4mの円墳で、内法長2.34mの狭長な箱式石棺を埋葬施設としているが、埋葬施設からは遺物は出土していない。

後半期の横穴式石室をもつ古墳として、池津第1号古墳<sup>(13)</sup>・金田第2号古墳<sup>(14)</sup>がある。池津第1号古墳は湯木川中流の小さな谷奥斜面に築かれた直径12.8mの円墳で、葺石が施されている。長さ8.6mの石室は東に開口する。須恵器の子持器台が出土しており、6世紀後半に築造され、7世紀前半にかけて追葬が行われている。金田第2号古墳は湯木川下流の東に入り込む小支谷を北に望む丘陵尾根の南斜面に立地する直径15mの円墳で、長さ5.45mの石室は南に開口する。須恵器や鉄鏃・馬具・石突などの鉄製品、耳環とともに勾玉・丸玉・切子玉・霽玉・管玉や土製小玉などの玉類が出土しており、6世紀末～7世紀初頭の築造と考えられる。

常定・湯木・向泉地区には横穴が存在する。特に、8基が集中する常定では常定峯双第1～6号横穴<sup>(15)</sup>、常定第1・2号横穴<sup>(16)</sup>が調査されている。いずれも平面形長方形、横断面形アーチ形の両袖式の玄室に石積みの羨道と墓道をもつタイプの横穴である。常定峯双横穴群は湯木川中流の西に入り込んだ谷部を望む丘陵斜面に長さ6～9mの横穴が掘り込まれており、人骨片とともに須恵器や刀・馬具・鉄鏃・鉄釘などの鉄製品、耳環などが出土した。これらの横穴墓は6世紀末～7世紀頃に築かれたと考えられている。

古墳時代の堅穴住居跡や建物跡を検出した遺跡は、原畑遺跡、番久遺跡、向泉川平2号遺跡、

石谷3号遺跡<sup>U7</sup>、常定川平1号遺跡<sup>U8</sup>などがある。原畑遺跡では西から東に延びる丘陵頂部に4世紀後半～5世紀前半頃の竪穴住居跡7軒と古墳時代後期の竪穴住居跡1軒が検出された。前者は平面形円形・方形・隅丸方形で直径・一辺3～4mと小規模で柱穴がないか不明確な住居と直径・一辺5～7mと規模の大きな2・4・5～6本柱の住居とがある。一辺4.1m×5.3mで平面形が不整長方形のS B 16は2本柱の住居で、壺・甕・鉢・高杯・台付鉢などの他に手づくね土器や葎石・台石・磨石などが出土しており、一般的な住居とは異なった様相をみせている。調査区内からは剣形石製品が出土しており、祭祀関連の遺構である可能性もある。原畑遺跡の谷ひとつ挟んだ南側の丘陵上に立地する番久遺跡では一辺2.5～4.4mの小型長方形の住居跡状遺構2軒がみついている。柱穴は不明で、古墳時代前～中期頃のものと考えられる。向泉川平2号遺跡では丘陵の頂部から東側斜面にかけて2軒の方形住居を検出した。S B 2は4.1m×4.6mの平面形隅丸長方形の2本柱構造の住居跡で、焼失家屋である。土師器（壺・碗・高杯）のほか製塩土器や礫石が出土しており、6世紀前半～中葉頃に営まれたと考えられる。石谷3号遺跡では丘陵南斜面で、一辺4.4mの平面形方形の住居を検出した。2本柱構造で、東側辺の住居壁面にはカマドが造り付けられており、6世紀中頃に構築されたと考えられている。常定川平1号遺跡では、南北方向に延びる丘陵から西に短く派生する小尾根の頂部から北側斜面にかけて竪穴住居跡1軒を検出した。一辺5.2m×6.3mの規模をもつ平面形長方形の4本柱構造の住居跡で、焼失家屋である。高所側の住居壁南辺東寄りに造り付けのカマド跡が存在する。土師器（壺・甕）、須恵器（杯蓋・杯身・甕・鉢）のほか鉄滓が出土しており、6世紀末～7世紀初頭頃の住居と考えられる。

古代 口和町は旧比婆郡の西半に位置するが、古代においては旧比婆郡高野町・比和町及び旧庄原市西北部とともに「**恵蘇郡**」を形成していた。古代の恵蘇郡には恵蘇<sup>くわそ</sup>・春部<sup>はるべ</sup>・刑部<sup>けいべ</sup>の3郷があったとされているが、口和町域がいずれに属したかは不明である。古代の遺跡としては、金田石谷製鉄遺跡<sup>U9</sup>がある。金田第2号古墳が立地する丘陵の谷を挟んだ反対側の丘陵の北西斜面に立地しており、製鉄炉の地下施設と輪座とみられる台状の高まり、砂鉄置場・木炭置場が想定される平坦面などを検出している。復元製鉄炉は円筒形の堅型炉で、地下施設の上に直接構築された自立炉が想定されている。出土した木炭の<sup>14</sup>C年代測定により9世紀代の製鉄炉と考えられている。中世 泉荘は鎌倉時代前期に文献に現れる荘園で、口和町内の「**涌喜**」（現在の湯木・永田・金田）を中心に存在したと考えられる。詳細は明らかでないが、備後国守護長井氏や安芸国の有力在庁官人であった葉山城（源）氏との深い関わりが指摘されており、泉荘の中心としての中世における「涌喜」地域は当地域の政治的・経済的中心であったと考えられる。中世の口和町域には大きな勢力は存在せず、今の湯木付近を拠点とする湯木氏と大月付近に勢力を張った泉氏が知られる程度である。これらの勢力は、東側に隣接する地耽荘の地頭で、現在の庄原市高野町の**藤山城**や庄原市本郷の**甲山城**を拠点とした山内氏<sup>やまうち</sup>や南側の三吉氏の動向に大きく左右されながら、それらとの関わりを強めて行ったとみられる。そして、当地域は山内氏や三吉氏の背後にいる周防大内氏・安芸毛利氏と出雲尼子氏といった二大勢力が拮抗する地域として、それらの戦乱の渦に

巻き込まれていった。1490～1492（延徳2～4）年、三吉氏とともに現在の庄原市南部の延暦寺領泉田荘に侵略を繰り返した涌喜（湯木）氏の動きや1553～1555（天文22～24）年の湯木氏の毛利方から尼子方への寝返りに端を発した大月の竹地川にかかる大合戦橋を挟んでの尼子氏と大内・毛利氏との対峙と衝突（泉合戦）などがその一例である。そしてその後、大内・尼子氏の滅亡と毛利氏の中国一円領主化を経て、口和町内の小勢力は毛利氏の家臣と化した山内氏や三吉氏の支配下に入ることになる。

中世の遺跡では山城跡があるが、発掘調査されたものはない。町内には山城跡が15か所あるとされているが、大月の黒岩城跡と湯木の釜峰山城跡が代表的なものである。黒岩城跡は町城西辺中央の三次市境にある山城跡で原畑遺跡や番久遺跡の西側背後にある。蛇行しながら東方に流れる竹地川南岸の山塊の南に短く延びる尾根上に築かれた山城跡（標高457m、比高145m）で、22m×35mの広さの主郭から南に階段状に主要な郭を連ね、東側にも小郭群が階段状に延びる。また、北側背後には堀切2条がある。主郭から南側に2段降りた郭には素掘りの井戸が残る。この黒岩城跡には毛利氏や三吉氏と繋がり深い泉氏が在城したとされる。町城東半の釜峰山城跡は、標高788mの釜峰山から南西方向に細長く延びた尾根端部に造られており（標高664m、比高300m）、15m×25mの広さの東西に長い頂部の主郭には土塁を設け、13mの落差で下った東方尾根には6条の堀切を設ける。主郭の西側に2つの郭、南側に3つの郭を設け、この南郭群の北側には堅堀2条を掘り込んでいる。山内氏や尼子氏と縁の深い涌喜（湯木）氏の拠点的な城跡とされている。

#### 註

- (1) 財団法人 広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（15）和知白鳥遺跡1（旧石器時代の調査）』2011年
- (2) 財団法人 広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（20）段遺跡』2012年
- (3) 財団法人 広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（23）只野原1号遺跡・只野原2号遺跡・只野原3号遺跡』2013年
- (4) 財団法人 広島県教育事業団『向泉川平1号遺跡』『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（25）向泉川平1号遺跡 向泉川平2号遺跡』2013年
- (5) 財団法人 広島県教育事業団『石谷2号遺跡』『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（26）石谷2号遺跡 石谷3号遺跡』2013年
- (6) 財団法人 広島県教育事業団『番久遺跡』『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（24）番久遺跡 原畑遺跡』2013年
- (7) 財団法人 広島県教育事業団『常定川平2号遺跡』『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（21）川平第1号古墳 常定川平1号遺跡 常定川平2号遺跡』2012年
- (8) 財団法人 広島県教育事業団『稲干場第3号古墳』『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（22）稲干場第2～4・9号古墳』2012年
- (9) 財団法人 広島県教育事業団『原畑遺跡』『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（24）番久遺跡 原畑遺跡』2013年
- (10) 財団法人 広島県教育事業団『向泉川平2号遺跡』『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（25）向泉川平1号遺跡 向泉川平2号遺跡』2013年
- (11) 財団法人 広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（16）曲第2～5号古墳』2011年

- (12) 財団法人 広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(22) 稲干場第2～4・9号古墳』2012年
- (13) 広島県比婆郡口和町教育委員会『池津第1号古墳発掘調査報告書』1979年
- (14) 財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター『金田第2号古墳発掘調査報告書』1999年
- (15) 広島県教育委員会『広島県文化財調査報告第7集 広島県比婆郡口和町 常定峯双遺跡群の発掘調査』1967年
- (16) 潮見浩「備後口和村常定の横穴発掘調査」『古代古備』第3集 古代古備研究会 1959年
- (17) 財団法人 広島県教育事業団「石谷3号遺跡」『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(26) 石谷2号遺跡 石谷3号遺跡』2013年
- (18) 財団法人 広島県教育事業団「常定川平1号遺跡」『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(21) 川平第1号古墳 常定川平1号遺跡 常定川平2号遺跡』2012年
- (19) 広島大学大学院文学研究科考古学研究室『金田石谷製鉄遺跡』2003年

#### 参考文献

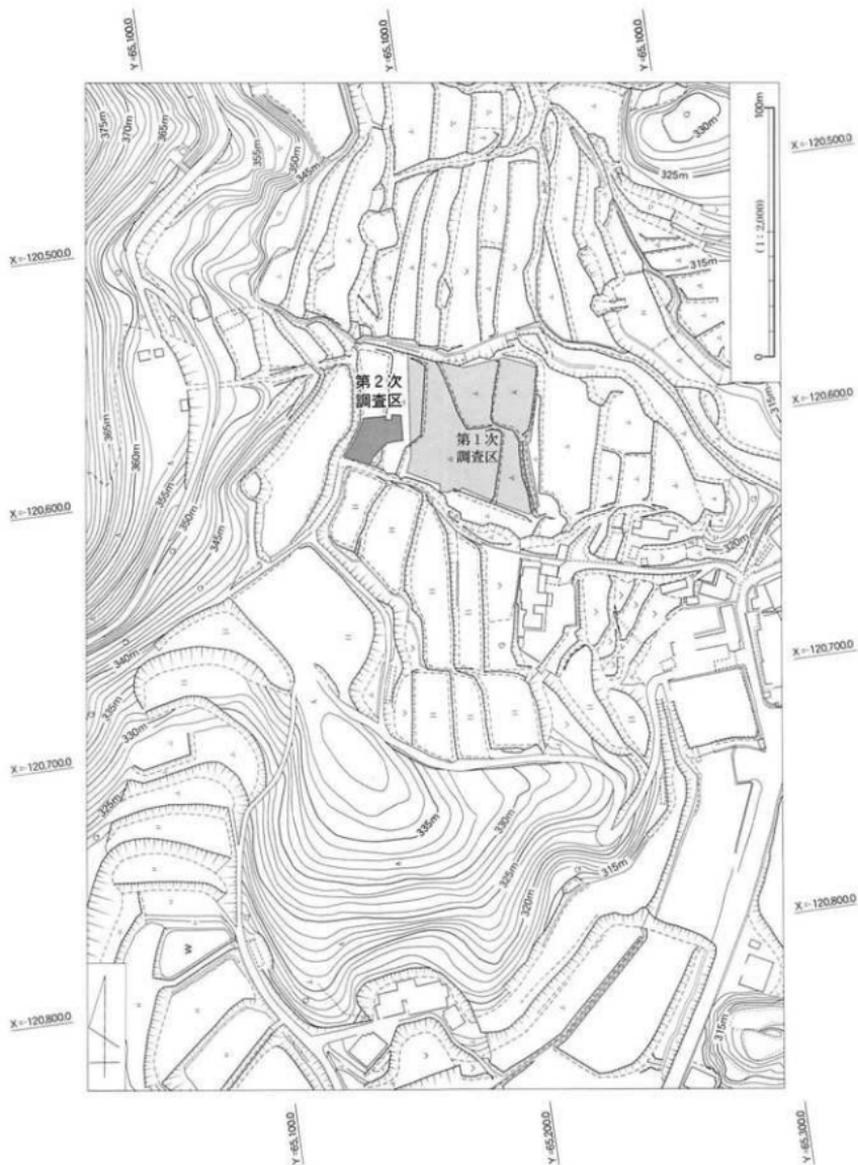
- ・口和町誌編纂委員会『口和町誌』2000年
- ・広島県『広島県史 中世 通史Ⅱ』1984年
- ・広島県『広島県史 地誌編』1977年

### III 調査の概要

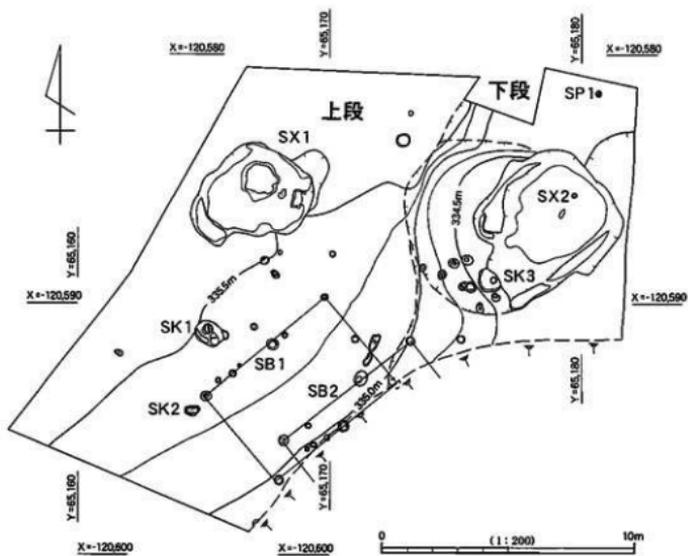
原畑遺跡は庄原市口和町に所在する弥生～古墳時代の集落跡で、中国横断自動車道尾道松江線の本線部分の工事に伴って平成 20（2008）年度に発掘調査を行った（調査面積 3,200 m<sup>2</sup>、第 1 次調査）。この第 1 次調査では古墳時代前・中期を中心とした時期の堅穴住居跡 17 軒などを検出した。今回の第 2 次調査区（調査面積 330 m<sup>2</sup>）はこの第 1 次調査区の西側に近接し、同じ丘陵上の高所側に位置する。三次市境の中世山城黒岩城跡が存在する山塊（標高 456 m）の東麓、南北両側に東から小さな谷が入り込む緩やかな丘陵上に立地する（標高 334～335 m）。調査区の現状は、約 1 m の高低差の上下 2 段の段状の田地である。調査区南東側の下段部分を中心に平成 25 年 9 月の台風襲来時の土砂崩れにより大きく崩落していた。

発掘調査の手順としては、まず表土をミニバックホーで除去したあと、人力によって遺構検出作業及び遺構の掘り下げを順次行っていった。また、下段の中央には黒褐色土が厚く堆積した小さな谷が入り込んでおり、その下半に存在する SX 2 を検出するためにミニバックホーを用いて黒褐色土の除去を行った。上・下段ともに遺構検出面までほぼ 30～40 cm の深さであるが、崩落部分に接する調査区南東部は 1.2 m の深さがあった。上段の遺構面は北西側が高く、南東方向に緩やかに傾斜していた。遺構面上に堆積する表土は大きく黒褐色土（耕作土）と淡黄褐色土ブロックを多く含む淡黒褐色粘質土（床土）から成っており、その下位の淡明黄褐色粘質土層上面を遺構面としている。

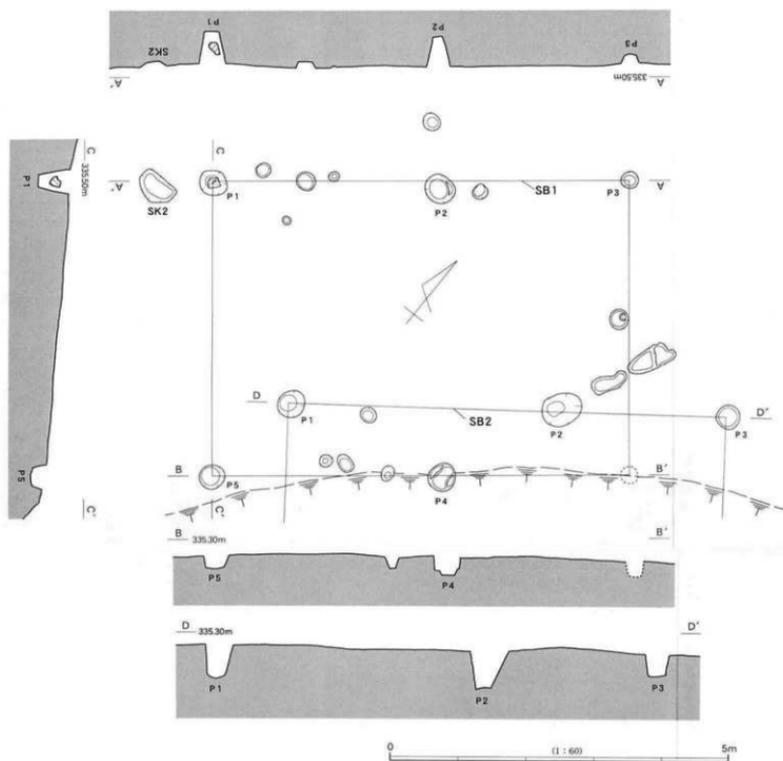
検出した遺構は、上段で掘立柱建物跡 2 棟（SB1・2）、土坑 2 基（SK1・2）、性格不明の遺構 1 基（SX1）、ピット群、下段では土坑 1 基（SK3）、単独ピット 1 基（SP1）、性格不明の遺構 1 基（SX2）、ピット群である。出土遺物は少なく、土師器・須恵器の破片を主体に、石製品（石臼）、鉄製品がある。図示したものは、高杯など土師器がやや多く、その他に須恵器片や石臼がある。鉄製品はいずれも用途不明の小破片であり、図示できなかった。



第3図 周辺地形図 (1:2,000)



第4図 遺構配置図 (1:200)



第5图 SB1·2实测图 (1:60)

## IV 遺構と遺物

掘立柱建物跡2棟、焼土坑2基を含む土坑3基、ほぼ完形の土師器・高杯が出土した単独ピット1基、性格不明の遺構2基を検出した。

### (1) 掘立柱建物跡 (第5図, 図版2a)

SB1・2の2棟で、いずれも上段南東側の崩落個所に接して検出した。周囲にはほかにもピットがあり、崩落した調査区南東側にかけて更に建物跡が何棟か存在した可能性がある。

いずれも北東-南西方向に長軸をもつ建物跡で、長軸方位はほぼ等しく、平行して建物が建てられたと考えられる。ただ、2棟は大きく重複しており、同時存在は考えられない。

①SB1 斜面高所側(北西側)にある2間×1間の建物跡で、その規模は桁行6.1m、梁行4.4m(建物面積26.84㎡)である。建物の長軸方位は北西-南東方向(N52°E)である。建物の平面形は長方形で、長方形度(桁行の長さ/梁行の長さ)は1.39とそれほど高くはない。東隅の柱穴が明確でないが、各柱間距離は桁行の北西辺のP1-P2間が3.3m、P2-P3間が2.8m、同じく南東辺南西半のP4-P5間が3.4m、梁行の南西辺のP1-P5間が4.4mである。桁行の南西半(P1-P2・P5-P4間)が3.3m・3.4m、同北東半(P2-P3間)が2.8mであるのに対して、梁行(南西辺、P1-P5間)は4.4mと桁行のそれに比べて1~1.6m長い。各柱穴の規模は、P1が長径42cm、短径37cm、深さ47cm、柱穴底面の標高334.82m、P2が長径42cm、短径37cm、深さ47cm、柱穴底面の標高334.82m、P3が径25cm、深さ15cm、柱穴底面の標高335.17m、P4が長径42cm、短径40cm、深さ30cm、柱穴底面の標高334.66m、P5が長径38cm、短径36cm、深さ24cm、柱穴底面の標高334.74mである。長径25~46cm(平均39cm)、短径25~40cm(平均36cm)、深さ15~47cm(平均33cm)で、柱穴底面の標高は334.66~335.17m(平均334.85m)である。柱穴の掘り込み面は全体に北西側が高く、南東側に4~5°の緩やかな傾斜で下る。よって、柱穴の深さ・底面の標高には北西半の柱穴(P1~P3)と南東半の柱穴(P4・P5)の間にいくらか差異が見出せる。即ち、深さについては北西半の柱穴が15~47cm(平均36cm)、南東半の柱穴が24~30cm(平均27cm)で、柱穴底面の標高は北西半の柱穴が334.82~335.17m(平均334.96m)、南東半の柱穴が334.66~334.74m(平均334.7m)と、北西半の柱穴が南東半のそれに比べて10cm程度深い。柱穴底面は平均で26cmも高い。なお、建物北東半の唯一の柱穴であるP3は平面規模が小さく、また浅い。柱穴底面の標高も南西半の柱穴(P1・P2・P4・P5)に比べると29~51cm高い。ほかの柱穴と機能面の違いが考えられ、底などの柱穴の可能性もある。

柱穴からの出土遺物はP1から石臼片が出土した(図版2b)。

出土遺物（第9図8，図版6c）西隅のP1内部から半分に割れた石臼片が出土した。底面から16～37cmの柱穴上半に斜めに入り込んでいた。

この石臼は上臼で、復元外径29.6cm、高さ11.4cmの大きさであり、石材は黒雲母花崗岩を用いている。下面には主溝と副溝で構成される臼目が刻されているが、その分画のパターンは明確でない。下面中央に芯棒受けの円錐状の穴があり、側面には挽き木を差し込むための穴が1～2個穿たれている。上面の凹みの深さは現状で2.3～3.2cm、下面のふくらみは最大0.8cmである。

②SB2 SB1の北東側に近接した建物跡で、現状では2間×1間程度の建物の北西半の桁行の柱穴列と考えられるが、南東半側が崩落して失われているので明確ではない。柱穴列の長さは6.4mで、各柱穴間の距離は南西半のP1-P2間が3.9m、北東半のP2-P3間が2.5mで、SB1同様南西半の柱間が長い。各柱穴の規模は、P1が長径42cm、短径38cm、深さ52cm、柱穴底面の標高334.6m、P2が長径60cm、短径47cm、深さ58cm、柱穴底面の標高334.45m、P3が径36cm、深さ38cm、柱穴底面の標高334.65mで、長径36～60cm（平均46cm）、短径38～47cm（平均40cm）、柱穴底面の標高334.45～334.65m（平均334.57m）である。北東端のP3の規模がやや小さく、いくらか浅い点はSB1に似ている。また、柱穴規模や深さも数値としてはいくらかSB2の方が大きいのがほぼ同規模であるといえる。なお、柱穴底面の標高は平均で30cm弱、SB2のそれが低い。

P1から土師器片、P2から須恵器片が出土したが、いずれも細片であり、図示できなかった。

## (2) 土坑（第6図）

焼土坑2基を含む3基の土坑があり、上段南半で土坑SK1と焼土坑SK2、下段南半で焼土坑SK3を検出した。

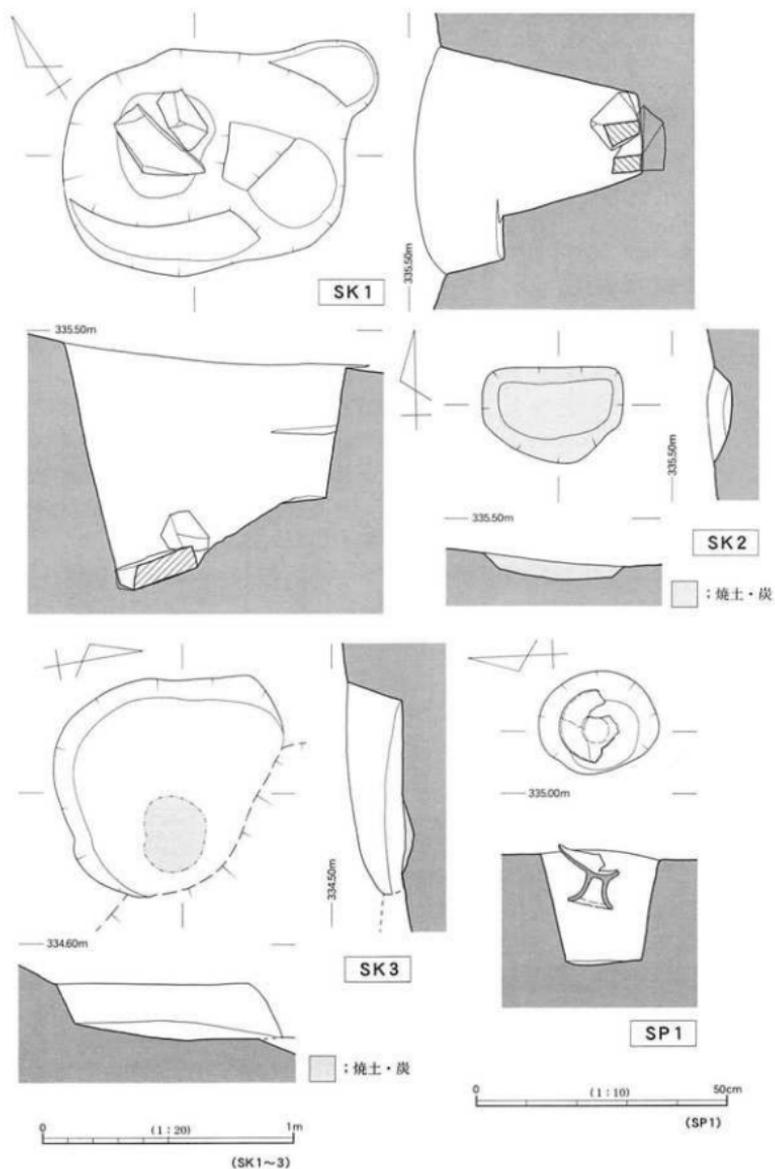
①SK1（図版2c）SB1の西側1.3mに位置する土坑で、平面形は北西-南東方向に長軸をもつ不整形円形である。長径1.12m、短径0.9m、深さ0.97mで、坑底面には20～40cm大の板状の角礫2個がみられた。出土遺物はない。

②SK2 SB1西隅のP1の南西側に近接して検出した焼土坑である。東西に長い長方形の平面形で、規模は長軸56cm、短軸38cm、深さ5～10cmである。坑内からは焼土+炭を検出した。出土遺物はない。

③SK3（図版3a）下段のSX2の南側に近接して存在する焼土坑で、北東側を失っている。平面形は楕円形とみられ、現存規模は南北0.92m、東西0.85m、深さ9～26cmである。坑底面中央東寄りで楕円形状の焼土+炭の広がりが見られた。東西31cm、南北24cmの大きさで、厚さ3cm程度である。出土遺物はない。

## (3) 単独ピット（第6図，図版5b）

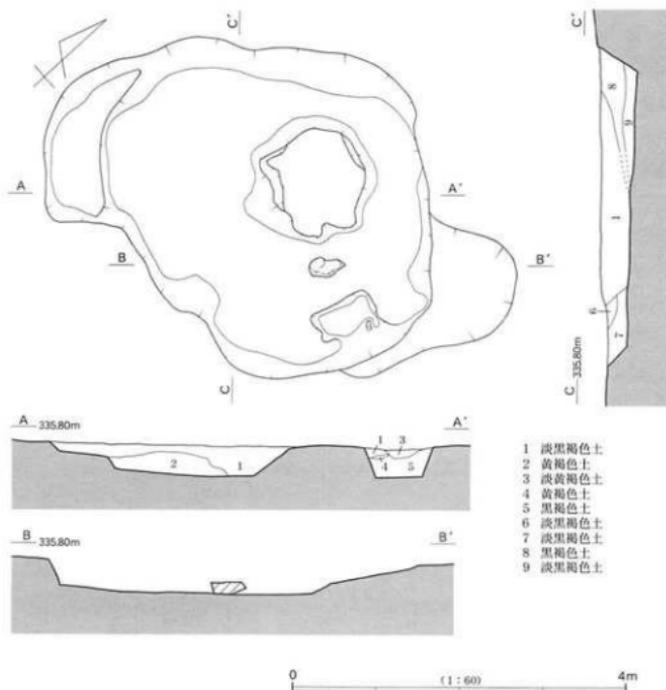
下段北東隅に単独で存在するSP1は北側調査区外の遺構の一部である可能性が考えられるが、内部から完形に近い土師器・高杯1点が出土した。ピットの大きさは長径24cm、短径20cm、



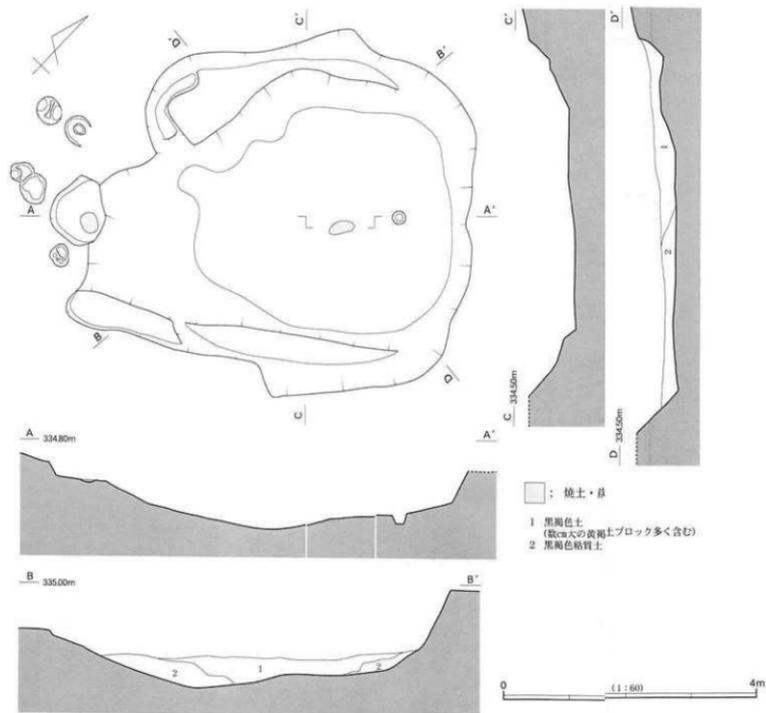
第6圖 SK 1 ~ 3・SP 1実測図 (1:10, 1:20)

深さ 23 cm で、高杯はピットの底面から 11 cm 程度浮いており、ピット上半に入り込んだ状態で出土した。

出土遺物（第 9 図 3、図版 6 c）復元口径 13.6 cm、脚端部径 8.5 cm、器高 10.5 cm の土師器・高杯である。杯部は浅いボウル状で丸みは弱い。脚部は器壁が厚く、外湾しながら外下方に延びて、端部を丸く納めている。杯部と脚部の装着は粘土充填法による。調整は、杯部内面は粗く雑な横方向のナデで、板ナデの可能性がある。杯部～脚部外面は縦方向主体の細かいハケ目のちにナデを施す。杯部下半～脚部にかけてはハケ目は殆どナデ消されているが、杯部上半ではハケ目がよく残る。全体に器形や造りが雑で粗い。色調は淡黄褐色で、胎土は 1 mm 大の石英を主体とする砂粒を比較的多く含む。



第 7 図 SX1 実測図 (1:60)



第8図 SX 2実測図 (1:60)

#### (4) 性格不明の遺構

上段・下段で各1基の性格不明の遺構を検出した。検出時にはいずれも平面形や規模などから竪穴住居跡と考えたが、調査の結果、柱穴の不在、壁面の緩やかな傾斜やその形状、凹凸のある坑底面（床面）など通常の竪穴住居跡と異なる点が多いことから、性格不明の遺構とした。

①SX1（第7図、図版3b・3c・4a）上段の北西側に位置する（標高335.5m）。平面形は不整隅丸方形で、北東側と南西側に貼り出し部分がある。これらを含めた規模は、南北5.6m、東西3.9mで、深さ（最大）は52cmである。坑底面は比較的平坦だが、南西側がやや深く、最大高低差は19cmある。また、坑底面中央北東寄りが島状の高まりとなっている。この島状部分は1.62m×1.5mの不整形のもので、平坦な上面はほぼ検出面の高さに揃う。東隣の坑底面には75cm×45cm、深さ10cm程度の長方形の掘り込みが存在し、この掘り込みと島状部分の間の坑底面には42cm×21cm、厚さ15cmの角礫が置かれていた。覆土の主体は淡黒褐色土と黄褐色土である。覆土中から少量の土師器・須恵器片が出土したが、図化したのは須恵器・杯蓋1点だけである。

出土遺物（第9図1）復元口径15.2cmの須恵器・杯蓋である。頂部は不明だが、丸みの強い体部から開き気味に外下方に垂下する口縁の端部を尖り気味に納める。外面の体部と口縁の境に凹線がみられる。外面体部上半には僅かに回転ヘラケズリが残るほかは内外面ともに回転ナデで、内傾する口縁内面には部分的に横ナデが施される。色調は、外面淡灰黒色、内面・胎土は灰色である。

②SX2（第8図、図版4b・4c・5a）下段中央の谷状部分の下半で検出した性格不明の遺構で、当初は南北幅6m余りの黒褐色土の広がりを東方から入り込んだ小さな谷状地形と捉えていたが、念のために南北方向に幅1mのサブ・トレンチを入れて掘り下げたところ、谷の検出面（下段の遺構検出面）から1.2～1.3mの深さで検出した坑底面＝明黄褐色土層上面でピット及び焼土＋炭の広がりを検出したことから、谷状地形の下半に遺構が存在すると考えられた。そして、土層断面を仔細に検討したところ、坑底面から30～40cm上方（検出面から80～90cm下方）のあたりで土層の違いがみられることが判明した。上層は黒褐色土で、下層は数cm大の黄褐色土ブロックを多く含む黒褐色土（第8図1層）を主体に、壁際には黒褐色粘質土（同2層）がみられた。この下層の1・2層は谷状地形下半の覆土で、坑底面で検出したピットと焼土・炭の広がりからこの遺構は竪穴住居跡の可能性があると考えられたため、谷状地形の全面的な掘り下げを行い、SX2を検出した。

SX2の平面形は北東-南西方向に長軸をもつ不整長方形で、その規模は長軸3m、短軸2.7m、深さ（最大）1.59mである。坑底面には緩やかな凹凸がみられ、最大高低差は46cmである。坑底面中央やや北東寄りに焼土・炭の広がりとお小ピット1がある。焼土＋炭の広がり40cm×18cmの大きさで、北東-南西方向に長軸をもつ楕円形を成している。ピットの大きさは14cm×12cm、深さ15cmである。壁面の傾斜は、北東辺と南東辺では約50°～60°と比較的垂直に近

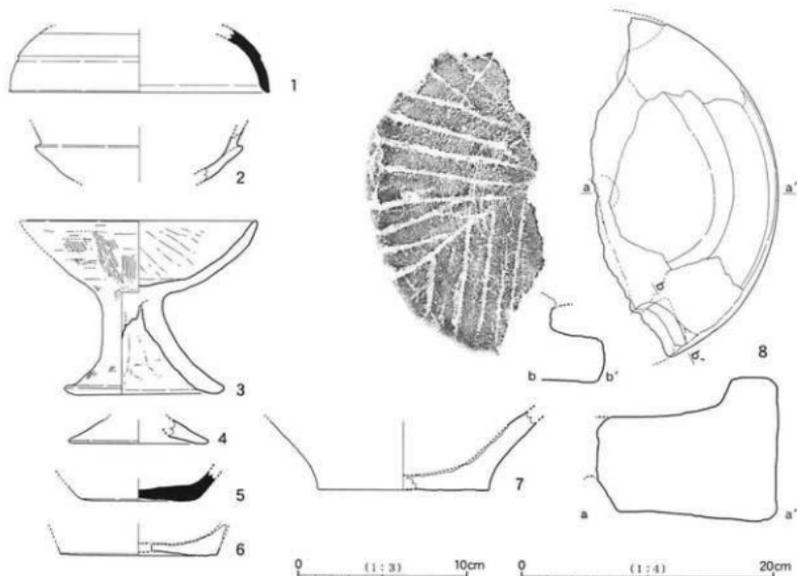
いが、南西辺と北西辺は $20^{\circ} \sim 30^{\circ}$ 程度とかなり緩やかであり、堅穴住居跡の壁面としてはかなり違和感があり、壁溝や主柱穴はみられない。

覆土から少量の土師器片が出土したが、図示できたのは土師器・高杯の杯部片1点のみである。出土遺物（第9図2）土師器・高杯の二重口縁の杯部の破片である。直線的に外上方に延びた1次口縁の端部にやや外湾気味に立ち上がる2次口縁が付くが、その端部は失っている。1次口縁端部での復元径は12.2cmである。調整は、内面が丁寧なナデ（あるいはミガキ）、外面は2次口縁が横ナデ、1次口縁は調整不明である。色調は、外面淡橙色～淡灰色、内面暗褐色、胎土淡褐色である。胎土は1mm以下の大きさの砂粒を比較的多く含む。

(5) 調査区内出土の遺物（第9図4～7、図版6c）

いずれも下段のSX2周辺から出土した小破片で、土師器2点、須恵器1点、土師質土器1点である。

4は土師器・高杯の脚端部片で、復元脚端部径7.8cmである。短い脚柱から強く屈曲して水平気味に開く形態のものとみられる。色調は淡黄褐色、胎土は比較的精良である。5は須恵器・杯身の底部片で、復元底径6.6cmである。調整は、底部回転ヘラ切り離し、内面から外面体部にかけての調整は回転ナデである。色調は淡灰色、胎土は精良、焼成は非常に良好である。6は土師



第9図 出土遺物実測図（1：3，1：4）

質土器・杯あるいは皿と考えられる。平底の底部は回転糸切り離し、体部外面は回転ナデが残るが、内面は器壁剥落により調整不明である。復元底径 9.3 cm。色調は、外面暗褐色、内面・胎土淡褐色である。胎土には 2 mm 以下の砂粒を比較的多く含む。焼成は良好である。7 は平底の土師器・底部片で、復元底径 10.0 cm。底部から外上方に外濤気味に延びる体部の外面には縦方向の板ナデ、下端には横ナデを施し、外底面はナデ調整を行う。内面は器壁が剥落しており、調整は不明である。器壁の厚さが 1 cm 程度の分厚い作りで、色調は内外面淡黄褐色、胎土は灰黒色と焼成は良くない。胎土は 3 mm 以下の砂粒を多く含む。

## V ま と め

原畑遺跡（第2次調査）の調査区は、平成20（2008）年度に発掘調査を行った第1次調査区（調査面積3,200㎡）の西側（丘陵基部側）にほぼ接しており、僅か数m離れているに過ぎない。今回は調査面積330㎡といったごく小面積の発掘調査であり、時期・性格が明確におさえられる遺構も少ないことから、ここでは第1次調査の成果を参考にしながら、今回の発掘調査の検討を行いたい。

第2次調査で検出した遺構は掘立柱建物跡2棟、土坑3基、性格不明の遺構2基とピット群であり、量的には少ないが、土師器・須恵器・土師質土器の破片や石製品（石臼）などが出土している。各遺構とも時期を示す遺物に乏しく、性格も明らかでない。東側に接する第1次調査区は黒岩城跡東麓の西から東に延びる長さ（東西方向）22m、幅（南北方向）7mほどのごく小規模な低丘陵（標高330～336m）のほぼ中央に展開する弥生～古墳時代の集落跡で、弥生時代後期の堅穴住居跡3軒、古墳時代前～中期の堅穴住居跡7軒、古墳時代後期の堅穴住居跡1軒などを検出している。古墳時代前半期を中心に1,2軒程度の住居から成るごく小規模な集落跡であったと考えられる。第1次調査の集落は、住居が調査区の西辺に沿うように南北に1列に並んで築かれており、標高333.5m付近の高所側の平坦地に偏在する。これに対して、調査区の中央～東半は西半に比べてより低位であり、弥生～古墳時代の住居は明確なものが存在せず、特に北東側や東辺付近は1～2mの落差の急斜面に接しており、地形的にやや不安定で、居住に適さない環境であったと考えられる。また、集落が立地する丘陵の南北両側にはそれぞれ東から西に幅5～8mほどの小さな谷が入り込んでいる。これらの谷と丘陵頂部との比高差は数m程度とそれほど深くはない。第1次調査区の西辺南半には西側調査区外に延びるとみられる小さな谷がある。これが第2次調査区の南東側で検出した谷部につながるとみられることから、第2次調査区は第1次調査区の弥生～古墳時代の小規模な「原畑集落」の西側背後に延びる小支谷の谷頭部に立地するといえる（「原畑集落」中心部から10～20m）。ただ、SX1・2が量的には少ないが覆土に古墳時代の土器を包含しており、古墳時代の遺構である可能性があるものの、明確な堅穴住居跡は存在していないことから、第2次調査区付近は「原畑集落」西側背後にあたり、集落の中心からは外れていたものと考えられる。しかし、下段のSX2北側で検出したSP1に示唆される第2次調査区外北（あるいは北東）側における建物跡群の存在は、第1次調査区西辺北半における弥生時代後期のSB3・19や古墳時代のSB1・14などの住居の西側にみられる一段高い丘陵部における「原畑集落」の広がりを示している可能性がある。

ここで、第2次調査区で検出した掘立柱建物跡について、少し言及したい。上段南半で長軸方向を等しくする2棟の掘立柱建物跡（SB1・2）を検出した。これらは重複しており、同時存在は考えられない。周辺にはほかにもピットが存在しており、土砂崩れによる崩落で失わ

れてしまった調査区南東部のほぼ 10 m 四方の範囲に建物跡がほかにも何棟が存在した可能性はある。第 1 次調査区では掘立柱建物跡は計 4 棟検出されている。SB 13 a・13 b は集落中心部にある 1 間×1 間のごく小規模な建物跡で、時期は不明とされているが、柱間距離は SB 13 a が 2.4 m, 3 m, SB 13 b が 2.4 m, 2.7 m と比較的長い。調査区北東側の一段低い箇所では検出された SB 2 と SB 20 は長軸方位がほぼ直交するセット関係が想定されるいずれも 1 間×4 間の大型建物跡で、コ字形の背面溝をもつ SB 2 が桁行 7.9 m, 梁行 3.9 m, SB 20 は桁行 15 m, 梁行 5.1 m の大きさである。柱間距離は、SB 2 の桁行が 1.8～2.2 m (平均 1.97 m), SB 20 の桁行が 3.0～5.1 m (平均 3.78 m) と長い。いずれも柱間距離が長いことから近世以降の遺構と推定されている。柱間距離が長くなると、時期的に新しいか、住居以外の小屋の性格が考えられる<sup>(註)</sup>。原畑遺跡の掘立柱建物跡は第 1 次調査区の SB 20 は平均で 4 m 近い。第 2 次調査区の SB 1 は桁行が 2.8 m, 3.3 m, 3.4 m, 梁行が 4.4 m, SB 2 は桁行が 2.5 m, 3.9 m で、いずれも柱間距離が非常に長い。SB 1 の P 1 からは石臼が出土しており、第 2 次調査区の SB 1・2 はその広い柱間距離や出土遺物から弥生～古墳時代の集落に伴う建物跡と考えるには無理があり、中・近世の住居以外の作業小屋の性格の建物跡である可能性が高い。

以上のように、原畑遺跡第 2 次調査では、東側に近接する弥生～古墳時代の集落跡の西側への広がりが考えられたが、調査の結果、それを明確に示すような遺構の存在はみられず、僅かに覆土に土師器・須恵器片を含む性格不明の遺構 2 軒のほかは、中・近世の作業小屋的な建物とみられる掘立柱建物跡 2 棟や時期・性格不明の小土坑 3 基、そしてピット群の検出にとどまった。唯一、調査区北東隅の下段で検出した SP 1 では完形に近い土師器・高杯が出土しており、第 1 次調査区で検出した古墳時代前・中期を中心とする「原畑集落」が、第 2 次調査区の北あるいは北東側にまで広がる可能性が考えられる。

#### 註

- (1) 梅本健治「Ⅴ まとめ 4 中・近世の油免遺跡 (1) 掘立柱建物跡, (3) 中・近世の集落構成」『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (Ⅳ) -油免遺跡の調査-』財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター 2003 年, 442～446, 449～450 頁。
- (2) 三浦正幸「付編 2 油免遺跡の掘立柱建物」『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (Ⅳ) -油免遺跡の調査-』財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター 2003 年, 489～493 頁。
- (3) 尾崎光伸「Ⅶ まとめ 2 遺構 (4) 中世以降の掘立柱建物跡」『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (24) -一番久遺跡 原畑遺跡-』財団法人 広島県教育事業団 2013 年, 186～188 頁。

a 原畑道跡遠景  
(南から)



b 調査前全景  
(南から)

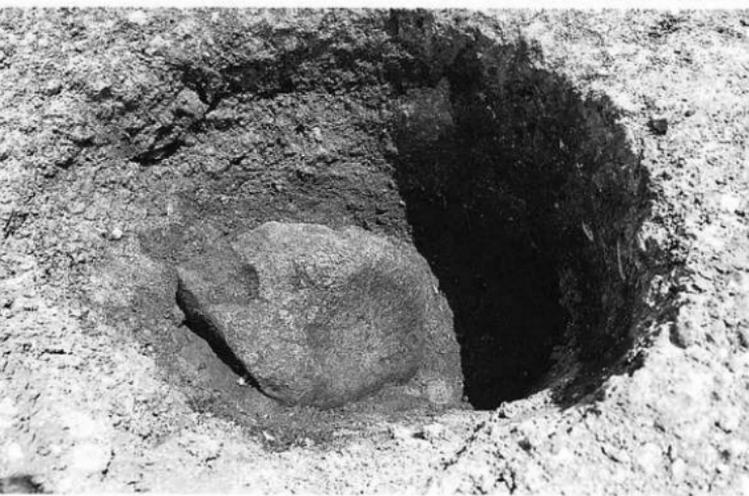


c 調査後全景  
(北西から)

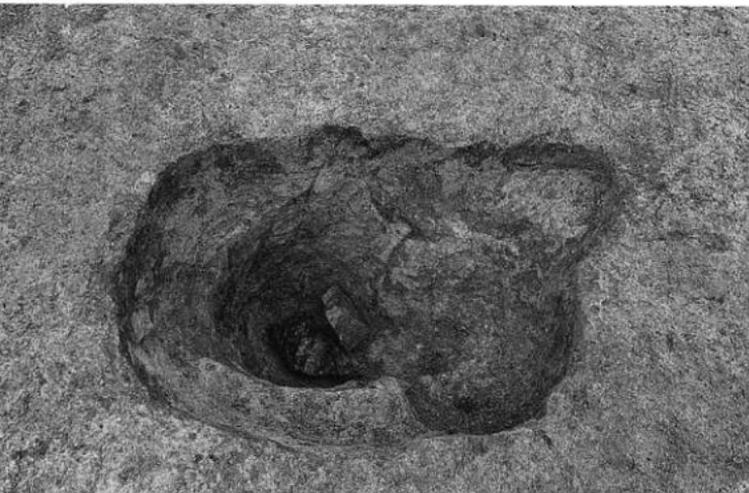




a SB1・2  
(北から)



b SB1・P1  
石臼出土状況  
(北から)



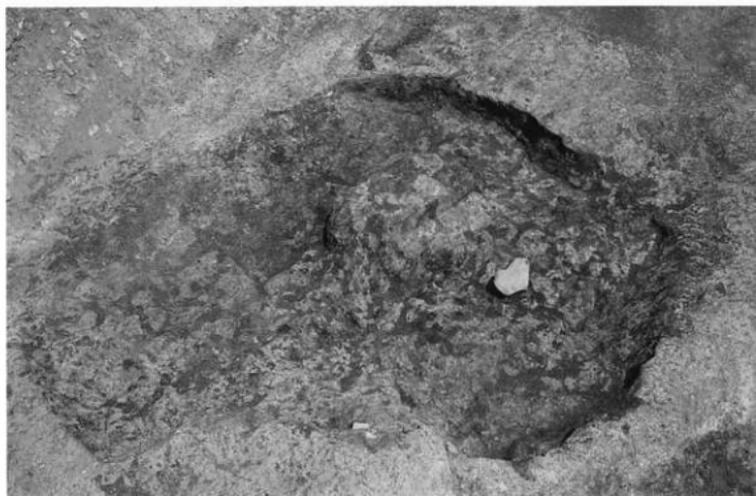
c SK1 (南から)



a SK3 (東から)



b SX1 (北西から)



c 同上 (南東から)



a SX1土層  
(南から)



b SX2  
(北西から)



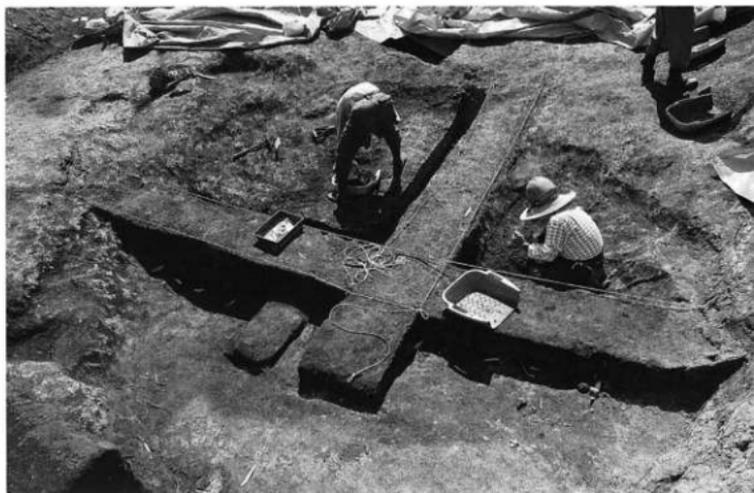
c 同上 (南から)



a SX2土層  
(西から)



b SP1高杯出土状況  
(南から)



c 作業風景 (SX2,  
北東から)



a 作業風景 (SK1,  
北から)



b 作業風景  
(SB1・2,  
東から)



3



7



8

c 出土遺物

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	ちゅうごくおうだんじどうしゃどうおのみちまつえせんけんせつとうにともなうまいごうぶんか ざいはつくつちようさほうこく							
書名	中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (44)							
副書名	原畑遺跡 (第2次調査)							
シリーズ名	公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書							
シリーズ番号	第72集							
編著者名	梅本健治							
編集機関	公益財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室							
所在地	〒733-0036 広島県広島市西区観音新町四丁目8番49号 TEL082-295-5751							
発行年月日	西暦2015年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
はらばたけいせき 原畑遺跡	ひろしま県庄原市 くわんおんしんまち くわんおんしんまち 口和町大月字 はらばたけ 原畑607-612-1	34210	34603- 179	34° 54° 39°	132° 52° 48°	20140407 ~ 20140523	330	記録保存調査
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
原畑遺跡	集落跡	古墳時代・ 中～近世		掘立柱建物跡 2棟、土坑3 基、性格不明 の遺構2基		須恵器(杯蓋・ 杯身)、土師 器(高杯ほか)、 土師質土器、 石製品(石臼)、 鉄製品	単独柱穴からの土師 器・高杯の出土、建物 柱穴からの石臼片の出 土。	
要 約	<p>平成20(2008)年度に発掘調査を行った第1次調査区の西側に接し、古墳時代前・中期を中心とする集落跡の西側縁辺部を調査した。平面形状や規模など住居状を呈した性格不明の遺構2軒は、いずれも覆土から出土した土器片などから古墳時代の遺構である可能性がある。また、掘立柱建物跡2棟はその広い柱間や柱穴内から石臼が出土したことから、中近世以降の建物である可能性が高い。</p> <p>第2次調査区は第1次調査区から僅か10～20mの近距離の谷頭部に立地するが、集落からやや外れた位置にあると思われる。調査区北東隅近くで検出したピットからはほぼ完形の土師器・高杯が出土しており、このことから第2次調査区の北側あるいは北東側に第1次調査区で検出した古墳時代集落が広がる可能性が考えられる。</p>							

公益財団法人広島県教育事業団発編調査報告第72集

中国横断自動車道尾道松江線建設等  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(44)

原畑遺跡(第2次調査)

発行日 平成27(2015)年1月16日

編 集 公益財団法人 広島県教育事業団事務局 埋蔵文化財調査室  
〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目8番49号  
TEL (082) 295-5751 FAX (082) 291-3951

発 行 公益財団法人 広島県教育事業団

印刷所 朝日精版印刷 株式会社